は起すと云ふことはないのであります。

斯う云ふ風な形に於て小學校の幼學年級が段々幼稚園と云ふものと其關係が密接になつて參ります。今日我國では、幼稚園から來たものは小學校に於ける學習態度の準備が出來て居ないと云ふので非難されたりして居る。詰り、受動的注意が足りないとか、集團的におとなしくして居ることが足りないとか言つて非難されたりする。併し其小學校の幼年級に於ける生活そのものが、其學習的態度と云ふものそのものが變つて仕舞つて、矢張幼稚園でやつて居ると同じやうなプロヂェクトの生活、自分の目的を自分で解決して行く、或は具體的の製作の生活が本體になつて來れば、豫めさういふ生活態度を幼稚園でならされて來たものは、卽ち其の小學校の生活に準備されて居るといふことになる。此處に始めて、幼稚園と小學校との本當の聯結がつく譯ではありますまいか。（筆記）

○教へんとせざる教師

「親鸞は弟子一人も持たず、たゞ如來の教法を、われも信じ人にも教へ聞かしむばかりなり、何を教へて弟子とは言はむ」といふが聖人の態度であつた。しかし聖人の內に、愚禿親鸞の方面と聖人親鸞の方面と二つのものが動いて居つた事を知らねばならぬ。こうして自らのたましひの問題に惱まれたのであるが、その惱みが久遠の人間性のどんぞこまで徹底した深いものであるが故に、これは十方衆生を代表したものである。この代表者としての苦悶は、やがて聖人が、聖人親鸞として敢て、御同朋御同行のために、著述をなし、化道をなされた所以であらう。

釋尊も同じ態度であつた。この意味に於て聖人は人天の大導師人生の大教師　大教育者であると言へるのである。しかしそれは敢て教えんとせざる教師、導かんとせざる教師であつた。

この態度なくして教師とならば、それは必ず過誤を生ずるであらう。（「教育學術界」―親鸞と教育研究號より）